研究論文

音楽を視覚で捉えて

ー楽句を中心にビジュアルな幼児音楽教育を考えるー

平　松　昌　子

Music Learning as Phrase Learning in the Nursery School

HIRAMATSU Shoko

Abstract: The texture of music may be said to consist of "phrases", as sentences or (phrases in language) combined make up a text. Understanding and memorization of music invariably start out from learning such "phrases".

This implies, among others, that, music learning in small children, at least partly, has to be facilitated as phrase learning. Not les important is that nursery school teachers should be sensibilized toward these objectives and conditions.

Accounting for the not much differentiated learning of small children, there is, as proposed in this paper, an opportunity to "visualize" music phrase learning through illustrations, picture books, and the like. Instruction of nursery school teachers should build up experience to such ends.

Ⅰ．はじめに

保育を目指す学生は、どのような音楽的環境の中で過ごした方が良いか。幼児教育・保育養成課程の音楽教育に携わっている者は常にこのことについて思考している。子どもを対象にする音楽教育は文部科学省の「幼稚園教育要領」[註1)]では今日、「表現」の名称で位置付けられている。これにより、幼児の音楽教育と他の表現活動の関連性を意識した教育目標が提示されている。

そこで、保育現場の担当者が子どもと共に音楽活動を行う際にはどのような表現環境を提供して、どのような音楽関連の活動を子どもに経験させれば良いのであろうか。またどのような手法を使用して実際の表現活動を方向付けるのが望ましいのであろうか。

まず子ども側にある条件を正しく把握することが要求されるであろう。保育者には正確な音楽知識を持つことや状況に合わせてそれを子どもに「通訳」できる力量が求められている。

この実力を向上させるように保育者養成課程の中で、そのための準備、練習や研修を導入すると保育者になる者は、それらを経験しない指導者より、音楽表現学習で培った豊富な「シナリオ」を活かす事ができるだろう。

ところで「表現」の語彙は子ども側の条件に応じて幼児音楽教育と音楽外の教育を関連付けている。よって、保育者養成課程の学生に、この複合的な取り組みを経験させる事は、ひとつの重要な課題である。このような複合的な「表現」の概念は、音楽と視覚的（ビジュアル）[註2)]に捉える対象をも統合している。これに伴い音楽と目で見え

北海道文教大学短期大学部幼児保育学科

るものとを、保育現場においてさまざまに関係付ける教育が大切になってくる。

この考えに基づいて幼児保育学科学生の一部のグループが最近、嘗て無かった音楽表現についての学習を経験した。学生たちは演奏した幾つかの曲を深く意識するため、その中の楽句演奏をよく聴き、そこで受けた発想や連想を基に「絵」を描いた。それから各人は、絵と演奏曲についてのイメージを更に発展させて「物語」を作成した。絵と楽譜を合わせた「音楽絵本楽譜」を誕生させ、それの演奏発表等が行われた。

以前、子どもの紙芝居や音楽紙芝居があり、音楽教育者間でも意識されていた。今回レポートした実践は、この音楽へのアプローチの延長線上にあり、各々はビジュアルなものとストーリー性が音楽に合流した教授法に基づいている。

参加した学生が経験した実践と同様なものは最近、幼児音楽教育の中で再認識されている。その一方、音楽文化の歴史を遡れば、そこにも音楽とビジュアルなものを統合する現象が潜んでいる。例えば、ムソルグスキーの標題音楽にはこのような要素が含まれているので、これを出発点にして述べたい。

Ⅱ．標題音楽を参考に

ムソルグスキーの古くからの友人であるビクトル・ハルトマン氏が急逝した。1874年に故ハルトマン氏の遺品、水彩画、写生画、その他のものが蒐集され、記念の展覧会が開催された。ムソルグスキーがこれらの作品を見て感動し、後世にこの印象が残るようにピアノ曲「展覧会の絵」を作曲した[註3)]。この楽曲は一種の組曲で、この中の各部分間に幾度も「プロムナード」の曲が登場している。つまり、彼がある「絵」から次の「絵」へと歩いて鑑賞している様子は「プロムナード」の曲で表現している。この手法によりムソルグスキーは標題音楽の新しい形式を確立した。「展覧会の絵」の曲では真似のできない個性的な斬新さ、オペラ的な演劇性、具象性や分り易さが表出している。作曲家が展覧会の展示物の絵画10点を選択し、それぞれの絵を見たときの印象を音楽で表現した。

ムソルグスキーが、「絵」から受ける印象を作曲した曲の幾つかを紹介しよう。最初の絵画は[註4)]「小人」を題材にし、その音楽は驚いたように飛び跳ねて動き回る様子を感じさせている。「リモージュの市場」の描写の曲では、暗く神秘的な調べが表現されている。「カタコーム」の曲になると、悲しげであり、死者へ語りかけているかのように音楽が流れている。最終の「キエフの大門」の曲は力強く始まるが、その中には冒頭の「プロムナード」風な旋律が潜むように組み込まれている。演奏者は和音群の中からこの主旋律が浮き立つようにすれば、臨場感溢れる演奏となる。

ムソルグスキーの「展覧会の絵」の楽曲が、絵画と音楽を融合した芸術品である事は言うまでもない。筆者の以前の研究において「ハイブリット」という語彙[註5)]が所々に登場し、幼児の音楽学習や幼児音楽教育の特徴を現わしてきた。ところが過去の有名な音楽作品を見れば特に、ムソルグスキーの「展覧会の絵」には「ハイブリットな」側面があると言える。

幼児音楽教育や保育者養成課程においては数年来、幼児に適応した総合的取り組みが強調されている事を念頭におけば、ムソルグスキーのこの作品から私たちには今日、音楽とビジュアルなものについて数々の示唆が与えられている。

Ⅲ．音楽紙芝居、飛び出し絵本楽譜などから学べるもの

現在では楽譜の中に色彩豊かな絵画がある絵本風楽譜[註6)]が随所に見られ、飛び出し絵本も多く見かけるが、飛び出し絵本の中に楽譜が印刷してあるものはまだ稀である。ところが飛び出し絵本と音楽を組み合わせる事は音楽のストーリー性を意識する上で効率的な方法になり得ると思える。

以前から紙芝居があり、絵と物語や音楽的要素を兼ねたものとして子どもに愛されていた。「ハイブリット」の概念を使えば、この紙芝居は、音楽、絵と劇を含んでいたので、これらのものは子どもに人気があった。イラスト入りの楽譜や飛び出し絵本の場合にも同様なことが言えよう。これらの事に関心を示した幼児音楽教育・保育と音楽学習関連の実践や研究が行なわれ、記録に残った三例について述べよう。

（1）子ども作成の音楽紙芝居･演奏と語り「ピーターと狼」（プロコフィエフ原曲）[註7]：

時代を遡ると40年以来、様々な絵本風楽譜が子どもを対象に次々と出版されてきた。子どもが興味を示すよう工夫されていたこのような楽譜を使用して３～４年生の二人の男子小学生の演奏会出場が企画された[註8]。子どもの音楽に対する興味、関心や一般教養を高めることを目指し、この音楽会参加が進められていた。二人の生徒の出演までのピアノ練習期間が限定されていた。市販の絵本風楽譜を参考にして生徒たちは、準備期間中に絵、物語と楽譜を記載し、独自の音楽紙芝居パネル数枚を用意した。演奏当日には舞台のコンサートグランドピアノ側面に置いた絵画キャンバスにそのパネルが立て掛けられて、二人は分担して楽曲演奏と物語の語りを発表した。

（2）服部公一作曲「動物園のピアノ」を基本に[註9]学生が作成した音楽飛び出し絵本：

分かり易く作曲してある楽譜から楽句[註10]を選択して、その演奏で思い浮かぶ発想を基に、新音楽素材の音楽飛び出し絵本を学生が作成した[註11]。使用した楽譜は「動物園のピアノ」の中の「お散歩たぬきと自動車」で、楽譜中から絵、詩（物語）と楽句奏部分を選択して個性的な音楽飛び出し絵本の素材が創作された。創作にあたり音楽奏のヒントとなる「詩」が楽譜上に記載されていたので、その一部を紹介する。

「たぬきが夜中のハイウエイに、ひょっこり、ひょっこりと、略…
そこに車のヘッドライトがピカー、
自動車の警笛がパパー、ブブー、パパー、ブブー
にげろやにげろ、ポンポコにげろ…略」

ここでヘッドライトを現わす言葉は、「ピカー」というオノマトペとなり、これに応じた楽句が登場している。次に光を神秘的に感じさせるために全音音階が利用されている。自動車の警笛音「パパー、ブブー」では、小さな子ども自身がクラスター打ち奏法で楽しめる音楽楽句が使われている。次の「にげろやにげろ」のところでは、逃げる速さを示す為、Allegroが登場し、その雰囲気がよく伝わるように作曲されている。総括していえば、この曲の練習を通じて子どもは、音楽中のさまざまな場面へ案内され、それぞれの様子を実感できる。絵がそこに加われば、その実感が特に強くなり忘れがたい。Allegroの例で分るように、音楽用語の習得がこれらの学習と平行して進められている。

（3）絵本音楽楽譜の実践、中村佐和子作曲の「プークン・プクン」[註12]：

1999年に別の学生の集団[註13]は中村佐和子作曲「プークン・プクン」を使用し、絵本風の音楽楽譜を作成した。この楽曲には楽句が多く挿入されてあり、寸劇に活用し易い。ここでも詩が音楽を伴うのが特徴で、その内の一部を抜粋する。

（語り）「…赤ちゃんカブトムシのプーくんはお兄さんが相撲をとって遊んでいるのがうらやましくてなりません…
（うたの歌詞）カブトムシのプーくんも相撲をとって遊びたい
ぼくもはやく大きくなりたいなぁと言いながら足元の石を池に蹴飛ばしました」

この絵本楽譜自体の歌詞は、演奏をする上で助人となるように作曲されている。使用している旋律の伴奏には基礎的な和音が使われ、無意識のうちに学習者の学習が進展するような工夫が窺え

る。曲中の楽句には、把握し易いベーシックな長音階とその主要三和音が使用されてあり、子ども自身が演奏するときの手助けが多い。今回学生が作成した絵本楽譜の場合、この手助けを更に強調する傾向がみられた。

この事例から分るように保育を目指す学生は、楽句奏を形象化し、新しい音楽表現素材を作り上げる実力を身に付けることが可能になる。音楽飛び出し絵本、絵本風楽譜創作の実践を通じて、子どもと音楽の理解も深まっていく。そこで将来、保育現場で実践のための手法を考え出す姿勢が生まれ、洞察力も深まり、イメージが豊かになる。究極的には子どもと向き会うときのレパートリーが拡張される。

Ⅳ．今回の実践のしくみ

幼稚園教諭・保育士を養成している本学科では、学生が音楽系科目の「総合表現」を２年目に履修している。総合的見地で音楽表現を捉えることはこの科目のひとつの目標である。今回、標題音楽風の楽曲演奏と楽句奏を中心に18名の学生が取り組んだ。勿論､平常時で学生の学習目標は、ピアノや鍵盤楽器の演奏力向上や弾き歌い曲目の拡大であり、これに向かって多くの課題が設定されていた。ピアノ楽器の特質上、１台のピアノで多くの学生が演奏を同時にできないため、このグループでは、少人数編成によるピアノ学習が進められていた。今回の新形態による音楽表現学習を経験した学生はその学年の一部だけであった。

学生たちが絵と詩（物語）を挿入した新楽譜作成を目指して取り組んだその実際について述べよう。2007（H19）年12月の初旬に学習目標についての説明があり、各人の演奏楽曲が選曲された。それに続いて曲想や楽句についての理解は深まるように、また絵を描く際の題材が音楽に繋がるように、指導者より説明と模範演奏があった。その後に学生がピアノ練習を開始した。２～３週間を過ぎた頃、各自が担当曲を演奏ができたとき、その曲の曲想と楽句を深く理解した段階で学生たちは、そこで感じ取れるテーマを基に絵本風の楽譜を作成した。個性的な独自の絵本楽譜を目指して学生が製作に挑んだ。さらに個々がその絵の作成を冬季休暇中に推敲し、休み明けに纏めたものを持ち寄った。練習過程を通じて以下の具体的手順が目安になっていた。

1)　適切な楽曲を選出する課題があり、利用できる短い楽曲が提示されて、それについての説明が行なわれた。
2)　各学生が担当者と相談しながら楽曲を選曲することが進められた。
3)　音楽表現や楽曲理解に繋がるように、個々の学生を対象に演奏関連の指導が行われた。
4)　約２週間で演奏発表できるように目標が定められていた。
5)　ピアノ演奏の練習に加えて曲想を意識し、絵に繋がるように発想することが求められていた。
6)　その際、注意深く楽句奏を感じとって、絵と詩の音楽物語を関係付けるように創造する。
7)　発想したときの感覚で、絵と音楽物語の下書きを行う。
8)　そこで楽譜にスペースを作り、絵に物語を追加する。
9)　下書き期間中も、繰り返し演奏練習し、安定した演奏ができるように努める。
10）下書きができた時点で、中間発表を行う。
11）その時点でもう一度、模範演奏と従来の絵本楽譜を参考にする。
12）絵本に楽譜を挿入する幾つかの方法について検討する。
13）使用する楽句を写譜して、必要な分だけ用意する。
14）Ａ３程度の白紙を用意し、利用する樂句の楽譜断片等をその空間に散りばめて貼り付ける。
15）完成した音楽絵本楽譜を基に演奏発表を行う。

Ⅴ．幼児音楽教育を「ハイブリットな」音楽教育として捉えて

幼児や子どもにとって保育者は、音楽への重要な案内役になっている。小さい子どもの絶対音感が形成されるか否かは、この段階の音楽教育に関係している事がよく知られている。そればかりでなく、保育者の音楽教育は幅広い領域に亘り重大な役目を果たし、隣接教育分野までに影響を及ぼしている。そこで保育者養成課程でこの事を直視し、それに応じた音楽教育を目指す事が求められている。

保育現場では保育者による教育が音楽を超えた数々の役目をも果たしている事がよく知られている。ところで、保育者の音楽教育やその隣接分野の教育を繋げる所には大人相手の教育と異なるアプローチが必要になってくる。幼児教育要領やこれらの課題を視野に入れて筆者[註14)]は以前から幼児音楽教育のハイブリットな性質に注目していた。1988年以来の幼児教育要領で文部省（現在の文部科学省）は、音楽と図画工作を統合し「表現」で位置付けてきた事がその背景になっている。よって幼児の音楽への案内役の保育者は、大人として充分に音楽を理解しなければならない。他方で保育者は幼児特有の条件を把握し、それに相応しい音楽教育を提供する事が求められている。実際の条件下で幼児は、音楽について学びながら、他の事柄についても学んでいる。そこで、幼児の音楽学習は「ハイブリットな」特徴を示し、保育者もまた、この特異性を意識しなければならない。保育者が音楽情報を扱い、保育現場でそれを適応できれば良いとの考え方は、1987年まで支配的であったことが事実である。ところで保育者は保育現場の子どもに対して実際に、ハイブリットな音楽教育を提供できるために、それなりの準備、訓練や経験がその前提となってくる。

Ⅵ.「ハイブリットな」幼児音楽教育における楽句の役割

そこでは保育者養成課程において、「ハイブリットな」幼児音楽教育の幾つかの取り組みが求められ、前もってその理論と実践を浸透させる事が大切である。つまり養成課程の学生は「ハイブリットな」教育の実践を経験し、その実態を理解することが大切になる。何故なら、これらについて学習した保育者は、経験を持たない者よりも良い幼児教育を進める事ができるからである。

結果的には、このことに繋がる幾つかの課題が表出してくる。まず保育者自身がこの新しい音楽教育についてのイメージを形成しなければならない。オペラ、楽劇等から分るように、大人の音楽では以前から複合的なジャンルがあり、そこを学生の学ぶ出発点にすることはひとつの選択肢となり得る。幼児教育現場では以前から、音楽人形劇、音楽紙芝居や音楽楽譜絵本が登場し、この伝統に結び付けて「表現」の概念に応じた幼児音楽教育を模索する事も選択肢のひとつになり得る。幾つかの研究を通じて、この種の取り組みについての論議が既に進められている。

音楽教育とその他の教育を上手に組み合わせる実力が保育現場では不可欠である。そこで求められる準備、経験について前述してきたが、「ハイブリットな」音楽教育は、音楽分析に対しても嘗て無かった新しい視点を提供している。以前、筆者は「音楽のリズムが音楽の基本的な要素であり、子どもの踊り、遊戯、言語習得と深く関わっている。大人対象のリズム教育はそのままでは幼児向けのリズム教育の模範になり得ない。幼児の音楽観に合わせたハイブリットなリズム教育が大切で、そのための訓練を通じて将来の保育者の力量を高める必要がある」[註15)]と指摘した。この例で分るように、ハイブリットな音楽教授法はリズム教育にまで及び、新しいアプローチの発端になってくる。

楽句（フレーズ）の場合には同様な条件に向き

あう。楽句は「ハイブリットな」幼児音楽教育を進める過程上、重要な役目を果たすことが今回の実践と研究を通じて繰り返し観察・立証されてきた。楽句のこの役割については心理学等が認めるだろうが、楽句を「表現」の教育の中で意識し、それを教育のツールまでに仕上げるためには特別な取り組みが必要となってくる。

音楽経験の少ない幼児は複雑な旋律をまだ理解していないゆえ、その範囲の音楽にもまだ「参加」できない。そこで、子どもが理解できない音楽は、子どもにとって雑音のようなものであり、音楽の理解への道が閉ざされてしまう恐れがある。これとは別に、幼児教育要領上の「表現」の概念は、幼児の表現活動と教育的要素の両方に跨っている。そこで幼児自身が表現活動する事と「表現」の概念を通じて音楽に参加する事が要求されている。つまり幼児と音楽の出会いは幼児にとって参加可能なものにならなければならない。そこで幼児が音楽を簡単に理解し、音楽に充分に参加できるところには、楽句と楽句奏が存在している。楽句と楽句奏を出発点に幼児は目で見えない音楽への道に踏み込むことができる。

幼児が音楽と出会うことは１対１の出会いだけではない。この出会いには、従来の音楽教授法の対象になり得ないファクターまでが介入している。特に幼児音楽活動は通常、ビジュアルな要素を伴う。保育者はこのことを意識し、これに応じた表現教育･音楽教育を模索しなければならない。その幼児のハイブリットな学習と教育の入口には楽句がおかれている。ハイブリットな幼児音楽教育の効率の一部は、このような楽句に対しての対応にかかっている。

楽句と言われるものを仮に「小さなストーリー」として想像することもできよう。幼児の音楽学習と幼児音楽教育はこの楽句を無視できない。なぜなら楽句の「小さなストーリー」は、幼児と幼児教育にとって音楽の理解、音楽の構造性、音楽のストーリー性とドラマへ到達するための入口となるからである。尚、その向う側には、より大きな音楽活動や音楽作品への道が広がっているのである。

引用・参考文献

註１）　大蔵省印刷局　文部省「幼稚園教育要領」1988

註２）　平松 昌子著 「音楽とパペットショーこれからの展望」 全国大學音楽教育学会研究紀要　7号　1996 （幼児教育上のビジュアルメディアの役割を論じたもの）

註３）　ムソルグスキー作曲「展覧会の絵」(楽譜) 3073-121010-3913

註４）　アビゾワ著 伊集院俊隆 訳「ムソルグスキー、その作品と生涯」新読書社　1993　p. 122～123

註５）　平松昌子著 「幼児音楽をハイブリットな教育として捉えて」 北海道文教大学研究紀要第28号　2004

註６）　宮本良樹 編曲「ヘンゼルとグレーテル」（楽譜）全音楽譜出版社　1992

（この他に、「くるみ割り人形」、「白鳥の湖」、「動物の謝肉祭」、「マザー・グース」等が強い印象を残した）

註７）　プロコフィエフ作曲 千秋次郎編曲「ピーターと狼」（楽譜）全音楽譜出版社　1990

註８）　1990年12月、札幌市ルーテルホール

註９）　服部公一作曲「動物園のピアノ」（楽譜）音楽之友社　1989

（これ以外に、「ニシキヘビぼあーっ」、「かばさんの鼻に何かとびこんだ」、「ぞうさんランニング」、「子馬のジャズ」等の面白い楽曲がこの曲集に掲載されている）

註10）　目黒三策 編「標準音楽辞典」音楽之友社 1966　p. 1076　によると、「楽句（フレーズ）は旋律線の自然な区切りを言い、言葉では文章に相当するもの。バッハからブラームスに至る時代には速度に応じて通常２、４、８小節から

成っていたが、17世紀３、５、７小節から成るものも多かった」と記載されている。

註11）　1997年1月、札幌市教育文化会館小ホール

註12）　中村佐和子作曲「プークン・プクン」（楽譜）全音楽譜出版社　1970

註13）　1999年12月、札幌市教育文化会館

註14）　平松昌子著「学生の音楽観と幼児音楽に向う姿勢：幼児保育学科の学生を対象にした調査を基にハイブリットな教育を考える」北海道文教大学研究紀要第31号　2007

註15）　平松昌子著「音と音の狭間で：幼児音楽教育や保育者養成におけるリズム学習の教育的意義」北海道文教大学研究紀要第32号　2008

（2009年１月14日受稿）